
HEROES 【inheritance】

みい×2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HEROES【inheritance】

【Nコード】

N8699G

【作者名】

みい×2

【あらすじ】

ある日、アンドーのもとにかかってきた一本の電話。助けを求め
るヒロの声に、かけつけるととんでもない宝探しの旅が待っていた。

第一話：パートナー（前書き）

海外ドラマ「HEROES」のシーズン2を下敷きに書いたファンフィクションです。ネタバレありなのでご注意ください！

第一話：パートナー

ヤマガト工業のアンドーのデスクから電話が鳴っていた。

仕事の電話だとばかりにアンドーはすつと手を伸ばし、電話に出た。

「はい・・・」

しかし、電話をかけてきたのは誰だ？

「・・・もしもし、アンドーくん？」

「・・・ヒロ？何してんだ・・・お前」

電話をかけてきたのはヒロだった。

ヒロは親友であり会社の同僚・・・いや、会長が亡くなってからは息子であるヒロも重役になっている。

「アンドーくん、助けて欲しいんだ」

切羽詰ったその声。

事情も、どういう用件でも聞かずにアンドーは反射的に返事してしまった。

「わかった・・・俺はどうすればいい？」

だって、ヒロはいい奴だから間違ったことをするはずもなく、いつだって二人は助け合ってきたから。

「・・・今すぐ、今すぐ僕のところに来て！」

「ヒロのところ？・・・今、会社か？」

「違う。僕の家だよ・・・会社、抜けて来れる？」

アンドーは周りを見渡した。

皆、忙しそうに仕事している。

「・・・任せとけ」

そういうと電話を切り、深呼吸した。

「・・・痛たたた・・・」

そう言ってお腹を押さえながら上司のところに行く。

「すみません。頭痛が痛いので・・・今日は早退させていただきます」

そう言うとペコリと頭を下げて、お腹を押さえたまま去っていった。上司は呆れながら「押さえるなら頭だ・・・馬鹿者め」と唸った。

そんな上司の言葉を背中で聞きながらアンドーはナカムラ家へと駆けて行く。

ナカムラ家は今時古風な日本家屋で、門の前のインターホンでヒロを呼び出す。

「・・・アンドー様でいらっしゃいますね？お待ちしておりました」インターフォンに出た声がアンドーに入るように言った。

格子戸を開けると、飛び石の先に玄関があった。

「あ・・・アンドーです」

出迎えたお手伝いさんにそう言うと、「こちらへ・・・皆様お待ちです」と奥の広間に通された。

「え・・・？皆様？」

ヒロを助けに來ただけなのに、なんだか嫌な予感がしつつ、通された部屋に着いた。

「アンドーくん！！」

大きなテーブルにヒロの顔が見えて、アンドーは少し安心した。

「・・・ヒロのパートナーが揃ったようです」

ヒロの姉が静かな声で言った。

「そのようですね。それでは・・・アンドーさんも席について下さい。」

これからナカムラ家の遺産に関する説明をさせていただきますので・
・・」

眼鏡をかけた男性が言った。

「・・・は？何ですって？」

アンドーは耳を疑った。

「ですから・・・とりあえず席についてください。

順を追って説明します」

イライラした様子でさっきの男が言った。

仕方なく、アンドーはヒロの隣に座った。

座った途端、ヒロが小声で耳打ちした。

「ごめんね・・・急に呼び出して。僕一人でなにかなと思った
んだけど・・・

アイツがパートナーが要るっていうからさ」

「・・・いいよ。アイツ、何者なんだ？」

さっきから偉そうに言う眼鏡の男性を睨みアンドーが聞いた。

「彼はうちの顧問弁護士なんだ。お父さんの残した財産などについて
も任せてる。

今日は、その話で僕も呼び出されたんだ」

小声の内緒話が耳に入っただのか、顧問弁護士はコホンと咳払いする
と「いいですか？」と断ってからこれからのことを話し始めた。

それは、アンドーの予想のつかないような話だった。

第二話：出発（前書き）

仕事中にヒロに呼び出されたアンドー。彼が駆けつけると驚くような話が待っていた。そして、アンドーとヒロの冒険が始まる・・・

第二話：出発

部屋を出たときから、アンドーは興奮気味だった。

「ヒロ！・・・どうする？・・・とりあえず、場所変えるか？」

最後の方は小声で、ヒロの耳元で言うが・・・如何せん、興奮気味で鼻息荒くてヒロは少し嫌そうな顔をした。

「・・・アンドーくん、やる気まんまんだねえ」

「そりゃ、そうだろう！！だって会長の遺産が僕たち二人に残されてたなんて！！」

アンドーは感激のあまり頬が高潮し、右手に握りこぶしで叫んでいた。

「・・・うん。・・・遺産は僕と姉さんにあるんだけどね。」

それに、僕がパートナーに君を選んだから・・・って聞いてないよね」

ナカムラ家の顧問弁護士の話では。

ヒロのお父さんであるヤマガト工業会長のカイト氏はヒロとヒロの姉に遺産を残し亡くなった。

ただし二人が遺産を手にするには条件がある。

一、必ずもう一人パートナーが必要（男女問わず）

二、顧問弁護士から手渡された物をたよりにパートナーと共に宝を見つけ出せ

「まるで宝探しだなー！！！！」

嬉しそうに顧問弁護士から預かった茶色の封筒を、アンドーは子供のように振り回した。

「ちょ・・・アンドーくん！落とさないでよ、何が入ってるかわかんないんだからね！」

「わかってるって」

のんきに笑うアンドーの笑顔を見ても、ヒロは浮かない顔のまま。

「・・・ヒロ？なんか元気ないな」

ヒロの顔をアンドーが覗き込む。

「だって・・・遺産なんて・・・ぼく。」

僕は父さんにとって自慢の息子じゃなかった・・・会社だって実質姉さんが継いでるし。

それに・・・父さんが殺されたのを・・・僕は・・・」

ヒロの顔が辛そうに歪んだ。

「ヒロ・・・お父さんが殺されるのを止められなかったこと、気にしてるのか？」

・・・お前のせいじゃないよ！！

いくら過去にいけるお前でも・・・無理なこともあるんだよ」

アンドーの手が優しくヒロの肩に置かれた。

（でも・・・大事な人を守れない能力なんて意味あるんだろうか？

僕は何のために・・・時空を飛べるんだろう。

こんな僕に・・・一体。）

「僕に・・・遺産をもらう権利なんて・・・あるのかな？」

そんなこと言うヒロに、アンドーは溜息をつきながら言った。

「でも・・・ヒロだって遺産が欲しいから俺を呼んだんだろ？」

顧問弁護士も言ってたよな、遺産の受け取り拒否することもできるって。

ヒロがそうしなかったのは、何故だ？」

「それは・・・そうしようと思っていたんだけど、弁護士が言ったんだ。」

僕には、遺産の他に父さんからのメッセージも残されてるが、それも拒否するのだった。

僕は・・・そのメッセージが知りたい」

「・・・じゃ、俺と頑張って宝を探そう!!」

宝と一緒にメッセージもあるはずだ!・・・な?」

ヒロが本当に欲しかったもの。

それは、父さんからのメッセージだった。

本当は遺産の話を聞かされたとき、拒否するつもりだった。

しかし、パートナーにアンドーを選んでまで欲しかったのは――

――守りきれなかった父からのメッセージ――

「ん!・・・頑張ろう!!」

顔を上げたヒロにアンドーは満足そうに頷いた。

「よし!!じゃ、出発だ――」

ヒロとアンドーは駆け出した。

「で。アンドーくん何処行くの?」

「・・・とりあえず俺の愛車で作戦会議だ!」

「車で?」

走っているうちにヒロは楽しくなってきた。

「お!ヒロ・・・やる気出たか?」

「うんっ!! アンドーくんが一緒だと心強いよ!」

パートナーに君を選んで、本当に良かった」

無邪気なヒロを見て、アンドーは照れた。

「い、いや・・・そうか？」

「うん！！運転も上手いしね！！」

やっぱり何処に行かなければいけないかわからないから、車運転で
きる人でないかね！！」

（・・・まさか、俺を選んだのって運転手代わりってわけじゃない
よな！？）

一瞬疑いの目で、アンドーはヒロを横目で睨んだ。

こうして、ヒロとアンドーはナカムラ家の宝を探す旅に出発した。

第三話：宝の地図（前書き）

ナカムラ家の宝を探すことにしたヒロとアンドー。
まず、すべきことは？

第三話：宝の地図

「開けるぞ！」

アンドーは弁護士から預かった封筒をビリッと開けた。

まず出てきたのは・・・古びた鍵と新しい鍵の束。

そして古びた紙、注意深く開いてみると地図のような絵が描かれていた。

「・・・まさか、宝の地図・・・とか？」

アンドーが絵を見てつぶやいた。

「何か目印のような物ないよ？・・・ただ家と道と森や川が描かれてるだけのようない気もするけど」

ヒロは地図を見たまま言った。

「でも、なんか意味あるはずだ！・・・よく見てみるよ」

アンドーが言うように、ヒロは目を凝らしてみたが、やはりただの絵のような気がしてきた。

「それより、こっちの鍵を調べた方がよくない？」

鍵の束を手に取り、ヒロはそれを眺めた。

新しい鍵は、見た事あるような・・・

家の鍵に似ている鍵が二つ。

おそらく・・・別荘の鍵じゃないかなあとヒロは思った。

こっちの古びた鍵は、見たことない・・・

少し色が変わって茶色っぽくなってる。

変わった細工がしてあるし、何か・・・高級感もある。

手に取ると、ズシリと重みも感じる。

ヒロは何気なく、古びた鍵を鍵の束から抜きとってじっくり見た。

「何だろう・・・この鍵・・・小さな穴があいてる。」

・・・模様みたいだ」

「・・・小さい穴？」

ヒロの言葉にアンドーが反応した。

「ヒロ、今・・・穴があるって言ったか？」

「うん」

アンドーは、手にしていた地図のような絵を光にかざした。

「・・・なにしてんの？」

ヒロがアンドーを覗き込んだ。

「・・・しっ・・・ほら、ヒロ！！見ろよ！！」

地図のような絵から一筋の光が漏れ出ていた。

どうやら、針で空けたような穴がこちらの地図にもあったようだ。

古びた紙を白く透けさせて、光が漏れ出ているのは・・・描かれた家の真後ろの森・・・。

「・・・ここだ！！ここに宝が眠っているんだよ！！」

興奮気味のアンドーが叫んだ。

「・・・そういえばこの家、うちの別荘に似てるよ！

やっぱり、この鍵は別荘の鍵なのかなあ」

「間違いないって！！ヒロ！！別荘に行こう！！」

「そうだね！！手がかりはこれだけなんだ。

別荘に行けば・・・もっと何かわかるかも！！

アンドーくん、別荘に出発だく！」

何かつかめそうになってきてワクワクした様子でヒロが立ち上がった。

しかし、そこはアンドーの車の助手席だったので、立ち上がろうとして、すぐに体勢を崩し頭をしたたか車のドアにうちつける。

「・・・いたた」

「大丈夫か？」

「全然平気!!!・・・それより、アンドーくん、出発」

「OK」

二人は意気投合し、パチンと手を合わせるとニツと笑った。

そしてシートベルトを小気味良い音でパチンと締め、車のエンジン音が高鳴った。

都会の風切り、別荘のある避暑地へとアンドーの愛車は走った。

すっかり宝を見つけた気でいるアンドーと、何か楽しいことが待っているような気がするヒロは高揚した気分でドライブを楽しんだ。

第四話：思い出（前書き）

ヒロのお父さんの遺産をもらうため、宝探しをすることになったヒロとアンドー。手がかりとなる地図からナカムラ家の別荘近くとわかり、さっそく探す二人だが・・・。

第四話：思い出

「・・・無い」

無言でお宝が眠っていると思われる場所を掘り続けて・・・もうどれくらい時が経ったろう。

やっと手を止めて、アンドーがつぶやいた一言をヒロは聞こえない振りをした。

「・・・無いよ、ヒロ」

「・・・そんなわけないよ！ここじゃなかったら・・・どこにあるっていうのさ！」

イラついたヒロの声が掘り続けた穴に響いた。

そんなヒロを落ち着かせようと、アンドーはヒロの首根っこを掴んでナカムラ家の別荘へと引きずり込む。

「いたた・・・痛いよ！アンドーくんっ」

ずるずると引きずられるようにして別荘に入ったヒロが叫んだ。

「・・・ちよつと休憩だ。」

ここに着いてから休憩もせずに炎天下にいるなんて・・・日射病になるぞ」

「大丈夫だよっ！それより、もっと他の場所も掘ってみよう！」

手がかりに残された地図を広げ、もう少し範囲を広げて掘るべきかもしれないとヒロが頭を悩ませている間にアンドーはキッチンで飲み物を用意してきた。

「ほら！・・・冷たいものでも飲んで、一息つけよ。」

外が暑いからって、俺たちまで熱くなってたら見つかるものも見つからないぜ」

そう言ってアンドーが差し出したのは、瓶入りのラムネだった。

「・・・なんか、懐かしいね」

「だろっ？子供の頃よく飲んだよなー」

よく冷やされたラムネは清々しい気分させてくれるには十分の刺激になった。

夕方の風が心地よく頬に触れる。

「・・・そういえば、子供の頃にもこうして二人でラムネ飲んでたね」

懐かしそうにクスクス笑いながらヒロが言った。

「・・・そういえば、そうだったなあ」

会社のつきあいだからと父親に連れてこられた、この別荘で二人はよく遊んでいた。

遊びつかれた二人に冷たい飲み物を出してくれたのはヒロの母親だった。

「・・・そういえば、ヒロ！あの時タイムカプセル埋めなかったか？」

「ええ・・・そうだったけ？」

「そうだよ！二人で今ある大切なものを埋めようって決めたじゃないか」

「うーん、そうだったような・・・あれ？どこに埋めたかな？」

二人はしばらく考えた。

「絶対この森だよ！・・・でもハッキリと場所までは覚えてないなあ・・・」

「記憶があいまいになってるからねえ。」

「・・・そうだ！僕が過去に行つてどこに埋めたか見てくればいいんだ！」

ヒロが良い事を思いついたと元気よくいつものヤッターを叫ぶ。

「そうだな！・・・ヒロ！俺も連れて行ってくれよ。

あの頃をもう一度見てみたい・・・」

アンドーも懐かしそうに目を細めて言った。

「いいよ！・・・一緒に行こう！」

二人はラムネを飲み干すと、空になった瓶を床に置き、お互いの肩を掴んだ。

ヒロは目を固く閉じると、アンドーとヒロが過ごした少年の頃のこの場所を念じた。

軽い眩暈がして、アンドーが目を開けると、今より新しい別荘の傍にいた。

「ヒロ・・・ここが？」

「そのはずだよ？」

辺りを見回すと、さっきまでとは森の様子も違う。

耳をすますと、子供たちの話し声が聞こえてきた。

「きっと僕たちだ・・・行ってみよう！」

ヒロの言葉に頷くと、アンドーとヒロは子供の声がする方向へと足を進めた。

木々の間から、子供たちの顔が見えた。

眼鏡をかけた子供と活発そうな顔の子供・・・子供の頃のヒロとアンドーだ。

二人は懐かしい気分で子供たちが何かを埋めるのを見ていた。

第五話：思い出（前書き）

子供のころにタイムスリップしたヒロとアンドー。幼い二人は、いったい別荘地でどこに何を埋めたのか？

第五話：思い出

「アンドーくん、これでいいんだよね」

幼いヒロが少し大きい友達に声をかけた。たぶん、彼がアンドーだ。

「ああ・・・あとは、俺たちが大人になったときにここに来て、このタイムカプセルを掘り出すんだ」

「わゝ、なんかわくわくするね！」

「大人になった俺たちって、どんなかなあ？」

「どんなだろう？」

幼いアンドーとヒロが大人になった自分たちを想像して話をして、るのを聞いて、ヒロたちは木陰から飛び出していきたくなったが、そのままじっと耐えた。

「じゃ、別荘に戻ろうよ！」

「ん！」

二人仲良く別荘に戻るのを見届けて、ヒロとアンドーが二人の居た場所に行ってみた。

まだ、掘りたての土が色新しいところが、タイムカプセルの場所。

「・・・掘ってみる？」

恐る恐るアンドーが聞いた。

たった今、幼い頃の自分たちの手で埋められたタイムカプセルが、なんだか神聖な物のような気がして・・・

掘るのを躊躇われた。

「・・・いや、アンドーク・・・」

ヒロが何か言おうとしたその時、背後から「こらーっ!!」と怒号が飛んだ。

「そこで何をしているっ!」

怖い声ですごんでいるのは、振り向かなくても分かる・・・父さんの声。

ヒロは鼻の奥がツーンとなって、涙を堪えるので精一杯だった。

「何をしてるか聞いてるんだがっ!？」

ナカムラ会長が詰め寄る。

「・・・いや・・・その」

「・・・僕たち、もう・・・帰ります。」

・・・失礼します」

しどろもどろなアンドークんの腕を引っ張り、強引に早足でその場を後にするヒロ。

「・・・っおい! いいのか?」

「場所は覚えたよ。お父さんの前でタイムカプセル掘れないでしょ? 時間を変えて掘り出せばいいじゃない」

理論的なヒロの答えに頷きながら、アンドークは引っ張られるまま、この時代を後にした。

再び、奇妙な感覚がして・・・ふと気付くと、同じような場所にヒロとアンドークは立っていた。

「・・・ヒロ、ここは?」

「あれから10年後くらいかな・・・
僕たちは、だんだん大きくなって・・・その頃にはあまりこの場所に遊びに来ることも少なくなってたね」

そうだった。

部活や受験勉強や・・・遊びだけでなくいろいろな日常の忙しさでタイムカプセルのことなんて忘れてしまっていた。

「・・・確か、この辺だよ」

スタスタと歩いて行くヒロについていくと、そこにはさつき見たよ
うな風景。

さすがに土の色は何処も同じで、どの場所かまではっきり分からな
くなっていたが、今度こそ二人で掘ってみた。

カッン

土は固くなっていたが、子供の掘った穴だけにそれほど深く掘らな
くても、すぐに固いものにスコップが当たった。

「これか・・・」

仰々しく取り出したのは外国製のお菓子の缶。

少し錆びていたが、蓋を開けると、子供の頃に流行したロボット人
形や漫画の切れ端。

「わぁ、コレ懐かしいなあ・・・」

そして・・・『せいやく書』と書かれた画用紙。

開くと・・・

『ぼくたちは 世界の平和のために 二人で力を合わせて たたか
うことを ちかいます！』

ひろ あんどう』

汚い字で二人の名前がサインされていた。

「・・・こんな小さい頃から、お前はヒーローだったんだな？ ヒロ」
潤んだ瞳でアンドーはヒロに語りかけた。

「・・・アンドーくんだって！二人で世界を救うんだよ！ね？」

ああ、そうだなと強く頷くアンドーは、その手にした幼い『せいやく書』の後ろに何か貼り付けてあることに気付いた。

「・・・！ヒロ、これ・・・見ろよ！！」

第六話：さがしもの（前書き）

ヒロとアンドーが見つけたタイムカプセルには・・・実は隠された
メッセージがあった。

第六話…さがしもの

『大人になったヒロへ』と書かれた小さな紙。

「父さんの字だ・・・」

眼鏡を上げつつ、ヒロがつぶやいた。

「読んでみるよ」

アンドーの言葉に頷くと、ヒロはその文字を読み始めた。

「大人になったヒロへ

ヒロとアンドーが子供の頃、ここにこのタイムカプセルを埋めるのを見ていて馬鹿馬鹿しいと思っていた。

成長していくお前と私は、最近すれ違ってばかりで、言いたいことも言えていない気がする。

そこでこのタイムカプセルのことを思い出し、大人になったお前にあてて今・・・言いたいことを手紙にする」

アンドーが先を促す。

「ヒロは、自分の正しいと思うことをすればいい。

お前たちが子供の頃に書いた、この『せいやく書』のように・・・まっすぐに自分の信じたことを貫きなさい。

私は、お前に期待している。

そして・・・アンドーという唯一無二の親友を大事にしなさい。

彼は、お前の生涯の宝となるだろう・・・愛する息子へ ナカムラ
カイト」

泣きそうな顔のヒロの肩にアンドーが手を置いた。

「・・・父さん、父さんはこの手紙を・・・僕に残したかったんだ

ね」

ヒロがそうつぶやいた。

確かに、この場所は宝の地図の近く。

「きつと、大人になって・・・このタイムカプセルを忘れてた僕らに、伝えたかったんだ。

でも、この地図じゃ・・・分かりにくいよね」

言葉で『タイムカプセルを思い出せ』って伝えてくれればいいのに」

「・・・会長に言われてでなく、自分たちで思い出して欲しかったのかもしれないな。

この場所に来て・・・小さい頃の純粹だったことを思い出せって、会長は言いたかったんだよ。

だから、この地図はあいまいなのかもな！

思い出せば、あとは・・・ヒロが時を越えてくればいいんだし、詳しく描かなくていいと思ったんだろう」

アンドーがそういうと、ヒロも頷いた。

「そうかもしれないね。

父さんは、いつも・・・自分で考えろって言ってた」

タイムカプセルを手にした二人は・・・もとの場所に戻った。

もう一度別荘に戻ると、顧問弁護士が居た。

「どうやら・・・宝を見つけられたようですね」

ヒロの手にしたタイムカプセルを見て、ニッコリ笑った。

「あ、これ・・・」

ヒロがタイムカプセルを差し出すと、弁護士はその手を制止した。

「これは、ヒロ様の物です。

私は事実確認しただけです・・・これで、あなたはナカムラ家の遺産を手にすることができます」

「おめでとうございます」と拍手された。

「ま・・・よかったな」

アンドーがホッとしたように言った。

「遺産より、このタイムカプセルの方が・・・僕には宝だよ」

ヒロは満足そうに微笑んだ。

そんなヒロとアンドーを見守りつつ、顧問弁護士が答えを言った。

「タイムカプセルもそうですが・・・私がカイト様から聞いていたヒロ様のさがしものの答えは二つありました。

タイムカプセルとあなたですよ」

弁護士が指差したのは・・・アンドー。

「え・・・俺？」

「カイト様は、ヒロ様があなたと一緒にタイムカプセルを見つけたこと・・・とおっしゃっておりました」

「・・・さすが父さんだなあ」

何もかもお見通しなんだね、とヒロは笑った。

「まるで青い鳥だな・・・」

童話の『青い鳥』も本当は家にいたってオチだったもんな」
アンドーが照れたように言う。

「じゃ・・・アンドーくんは、僕の青い鳥だねっ
いつまでも一緒にいてね」

満面の笑みでヒロがアンドー言った。

第六話：さがしもの（後書き）

暑いですね〜2009夏！！今回とびとびでの更新で、かなり話が混乱したかもしれませんが、一応？ラストがまとまってよかったです。次回はもっと計画的にUPするように努力します。今後も精進しますです〜<では、読んでくれた皆様ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8699g/>

HEROES 【inheritance】

2010年10月9日13時51分発行